戦力外通告

ルガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦力外通告

【Ｎコード】
Ｎ８８６８Ｙ

【作者名】
ルガー

【あらすじ】
「残念ながら来季は契約を結ばない意向です。」子供の頃から憧れだった野球選手。俺は無職になった…

プロローグ

――――満員の甲子園、１－０のまま迎えた９回裏。
１球１球にざわつきが起こる異常な緊張感が場内に漂っていた。

約４万５０００人、その視線の先には左腕がいた。
その左腕は相手の選手を嘲笑うかのように三振の山を築いていく。
そして、２６個目のアウトも空振りの三振で飾った。

――――あと、一人…
捕手のサインに頷きながら打者と対峙する。
豪快なフォームから投げ下ろされる直球に打者もフルスイングで応えた。
鈍い音…ミットに球が収まる音だった。

伊藤道真（いとうみちまさ）、甲子園優勝投手の誕生の瞬間であった。

プロローグ（後書き）

初心者で誤字、脱字などありますが温かく見守って下さると幸いです。

伊藤道真

‘カキーン’

快音と共に打球はスタンドへと放り込まれた。
しかし、歓声は小さい。ここは二軍…俺が味わった甲子園決勝とは月とすっぽんだ。

甲子園優勝投手となった俺はドラフトで9球団競合の末、【横浜ベイスターズ】に入団。
万年最下位球団ということもありキャンプは1軍に帯同。
しかし、キャンプ中に肩を故障し離脱。その年は二軍戦にも1度も投げられなかった。

2年目は二軍戦で5試合先発し1勝3敗、防御率は5，60

3年目はオープン戦で結果を残していたが、打球を膝に食らい離脱。
7月頃から、二軍で中継ぎを含め15試合に登板。0勝2敗、防御率は4，93

4年目も二軍スタート。本来の直球が投げられず12試合に投げ0勝7敗、防御率は6，46

5年目、23歳になった俺はまたしてもキャンプで肩を故障した。
そして今、二軍で今季初登板し、本塁打を打たれてしまった…

もう９月の末だ。
【横浜スターズ】は今年も最下位が確定してしまった。ちなみに１００敗ペース…

二軍監督が投手の交代を球審に伝えに来た。
俺は投手コーチに球を渡し、足軽にロッカールームへと引き上げていく。

「つかえねぇーな。」

投手コーチだが観客だが分からないが、はっきりと俺の耳に入る。
その言葉に反応して、更に歩くスピードを上げる。

なぜだがマウンドが少しだけ恋しかった…

通告

篠突く雨の音のなか、俺はビニール傘を片手に持ちながら歩いていた。
昨日の夜にマネージャーから明日、球団事務所に来いと言われたのだ。

もうあれしかないよな…

事務所に着くとロビーに座らされ、暫くすると奥の部屋へと案内される。
そこには、他にも４選手がいた。いずれも一軍で活躍した選手ではなかった。

息が出来ないくらいの緊張感がそこにはあった。
甲子園決勝の心地が良いものではない、もっと残酷さや絶望感が漂っている。

トレード…いや、無いな…

必死に光を探していた俺らにＧＭが背後のドアから入ってきた。
貧相な顔立ちで今にも倒れそうな細心だった。俺らは自然と身体の向きをそちらへ変える。

「えー、残念ながら来季は契約を結ばない意向です。」

「…はっきり言って下さいよ。戦力外って…」

俺は低い声でそう言っていた。
覚悟をしていたはずだが、やはりショックだった。

その後、マスコミの対応など諸々の注意が説明される。
どの選手も頷きもしなければ表情を変化させることもない。

雨の音がただ呆然と耳に入った。

電話

残酷な雨が伊藤道真を襲っていた。
まるで自分を小馬鹿にするように雨は更に強くなっていく…

電話が鳴った。反射的にポケットから携帯電話を取り出す。
松浦奏（まつうらかなで）だった。中学の時に知り合った彼女だ。

「…もしもし。」

「伊藤君、戦力外通告って…」

奏が言葉を濁した。
最近はこんなに早く分かるものなのか、球団のツイッターかもしれない。

「おう。さっき伝えられた。」

「…大丈夫？」

「まだ実感無いな…、俺の野球人生…いや、人生終わったんだよな…。」

「…。」

両者共に黙ってしまった。沈黙をただ雨が笑っている。

「まだトライアウトとかあるじゃん、頑張ってよ。」

振り絞るような声で奏が言った。甘い声の彼女が擦れ声だった。

彼女は非の打ちどころがないような女性だった。その彼女が泣いている…？

『ツーツーツー』

ブッチと音がして、ワンテンポ遅れて耳に入る。

ふいに空を見上げる。雨はまだやむ気配が無かった。

母

「いつ言われたの？」

「…今日」

実家に戻った俺は母と話している。
意外にも落ち着いていた母を見ると少し楽になっていた。

「これからどうする気なの？」

「…正直、引退しようと思うんだ」

ふーんと愛想の無い返事を母は返した。

「あんたまだ２３でしょ。それにその丈夫の身体なら働き口ぐらいあるじゃない？」

「…うん。」

自然と俺はリビングに飾ってある写真に視線を動いた。
そこには高校時代の仲間が誇らしげな顔で並んでいた。

どうしてもこれを見ると「こんなはずじゃ…」と思ってしまう。

自分でも思う。どこで間違えたんだろう？
練習を怠けたりすることもなかったし、コーチの助言にも耳を傾けた。
なのに何が悪かったのだ？もともと俺はこんなものなのか？これは偶然だったのか？

「そういえば奏ちゃんには言った？」
「ツイッターかなんかで知ったみたいであっちから電話が」
「ということは奏ちゃんってちょくちょくチェックしてたのかもね。」
「それって…」

言葉を濁した。母が薄らと笑う。
俺は携帯を取り出し、そしてメールを送った。
「じゃあ、俺行くわ母さん。」
「…どこへ？」

そんな母の言葉を背に俺は走り出す。

3文字のメール

松浦の視線の先には携帯電話があった。
伊藤君と記された送信者、無題の新着メール。自然と手に力が入る。

休日の真昼間に伊藤の所属する横浜ベイスターズのツイッターの
【以下の5選手に来季の契約を更新しない旨を伝えました】
という文章に、彼の名前が出ているのを見て、私は酷く落胆した。

彼が私よりずっと落ち込んでいるのは明確だったのにすぐ電話をしてしまった自分が情けない。
中学の頃からの付き合いだった彼の気持ちを理解できなかった自分が…

そして私は泣いた。

一つ息を吐き出した後、メールを開く。
そっちの家に行ってもいいか、ということが記されている。

私自身も彼に直接謝りたかった。いいよ、と3文字の短すぎるメールを送信した。

◆

ドアの前で伊藤は棒立ちしていた。
どんな顔をしてチャイムを押せばいいのか分からない。

戦力外を受けて失業者になった俺。
難関大学を卒業して1流企業に就職を果たした彼女。
お互いに溝が出来てしまったようだった。

俺は恐る恐ると手を伸ばしチャイムを押した。

ドアから出てきた彼女は気丈に振舞っていた。
無理に自分がそうさせてしまっているのかもしれないと思うとなんだか申し訳ない。

綺麗に片づけられたリビングのイスに腰を掛けると彼女はコーヒーを出してくれた。

「伊藤君、クッキー焼いたんだけど食べる？」

高校から付き合い7年目。未だに伊藤君、松浦さん、だった。
それは2人の距離があの頃からまったく縮まっていないということなのだろうか？

「…伊藤君？」

「あ…あの松浦さん。あのさ、俺さ…、奏っていってもいいかな？」

俺がこれからの去就でも語るのかと思ったのか

彼女は真顔から一転、破顔一笑という感じの笑顔を俺にくれた。

決意

「俺、やっぱりトライアウト受けようと思う。」

そう言い放つと奏の笑みは消え、真剣な表情へと変わった。
それがあまりにも美しすぎたため、俺の鼓動も早くなっていった。

「俺…松う…奏の笑顔が好きなんだよ。その優しい笑顔が。
甲子園の時だって、その笑顔のおかげで疲れなんか全然感じなかった。」

その時だった。
奏の目から滴がこぼれ落ちた。綺麗な白肌が不意に紅く染まる。

「笑顔、まだ見ていたいんだ。
野球じゃなくても見れるかもしれない。けどさ、野球で奏を喜ばせたいんだ。
甲子園優勝した時よりずっと最高の笑顔、俺はまだ…見ていないし。
」

そう言い切った時、俺の涙腺を何か熱いものが襲う。

涙目を凝らして奏を見ると静かに頷いていた。

◆

翌朝だった。
泣きつかれた俺は実家に戻るや赤ん坊のように爆睡してしまった。
そんな俺を起こしたのは電話だった。

「はい、もしもし。」

元々、自分は低い声だが寝起きということで一層、低い事に自分でも気づいた。

「あ、伊藤投手ですか？
初めまして私はプロ野球ドキュメンタリー番組
『不死鳥の男』の構成係を担当しております、金村と申します。』

なるほどと思った。
年に1回放送され、戦力外通告を受けた者を対象に密着する番組だ。
甲子園優勝投手が戦力外。ネタとしては十分に扱いやすいだろう。

「俺はいいですけど。」

「ありがとうございます。
それで、番組では彼女さん、親御様にも出演して頂きたいのですが

「。

迫る

「え？テレビに出演！？」

夜だというのに奏は声を荒げた。

「戦力外食らった選手が出る番組に奏の出演ＯＫしちゃったけど別にいいよね？」

と、淡々と言ってのけた彼に、だ。

「嫌だよ、私出ない。」

ほくそ笑みながら言った。

別に自分も出ても良かったのだが、なんだか少し彼を困らせてみたかった。

「え…頼むよ、奏が出たらテレビの視聴率も上がるしさ。」

「上がったって私たちには何の利点も無いよ。」

「…だっ！？」

困っている彼を想像すると声が出そうになる。

これ以上はかわいそうだったので分かったよ、いいよと返事を返した。

◆

古巣と呼ばれるかたちになってしまった横浜ベイスターズの球場で伊藤は投げていた。
自分と同じく通告された選手のバッティングピッチャーを引き受けている。
無論、全力投球だ。バッティングピッチャーいえど俺は悠長な事はしていられない。

「伊藤、なかなか良い球だぞ。1年目に近い。」

そう言ってくれたのはブルペンキャッチャーの別所さんだった。
シーズンオフだというのに、手伝ってもらって本当に頭が上がらない。

「これなら拾ってくれる球団は必ずあるぞ。」

「だと、いいですけど…」

「トライアウトっていうのは形だけでよ、獲る選手は大体、決まっているみたいだ。
だからその選手がしっかり普通に動けるか。そういうのを見るだけらしい。」

少し話が矛盾していないかと苦笑しながら頭を下げた。

トライアウトまであと1週間…
不安も迫ってくる時間と比例するように増えていった。

取材

「今後の去就というものは？」

「トライアウトに参加したいと思います。僕自身、まだ諦めない部分をあるので」

‘僕”に反応して、料理を作っていた母と奏が吹き出す。
奏が家のキッチンで母の手伝いをしている光景はずいぶんと微笑ましい。

トライアウトまであと3日。緊張も昂ぶる中、番組の取材が家に訪れている。

「球団から通告を受けた時の気持ちというものは？」

「そうですね。やっぱりショックでしたね。」

「伊藤投手はドラフト1位で入団しましたが、まさかこうなるとは思いませんでしたか？」

「あの時は…そうですねぇ…鳴り物入りで入団したわけですから…自分の未来も明るいと思いました。それが、まさかこのような形となるとは…」

「私は、こうなるかもって感じてました。」
母だった。料理が出来上がったようで箸を並べていく。

「私もです。プロの世界は厳しいと思ってましたから。」
今度は奏だ。口の両端を吊り上げながらこちらの顔を伺う。

そんな2人に目を背けながら俺はお茶で乾いた喉を潤した。

◆

「息子には良い夢を見させていただきました…」

そう声を高くして泣くのは母だ。
もらい泣きするように奏も頬に2つの道をつくっている。

俺も食事していた箸を置き、どうしたらいいのかも分からず俯く。

【家族の涙。甲子園優勝投手がトライアウト挑戦へ】

なんて宣伝されるのだろうと思いながら苦笑した。

ふと、昨日の別所さんの言葉が脳裏に浮かんだ。

———トライアウトは形だけで獲る選手は決まっている

だとしたらまさかトライアウトとはこの番組の為にあるものなのかもしれないな。

と思い、また苦笑する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8868y/

戦力外通告

2011年12月29日16時48分発行